

What's
Hot?
街を熱くするアレコレ!



●プロフィール
1985年丸岡町(現・坂井市)生まれ。春江工業高校、名古屋ビジュアルアーツを卒業後、1年間のニューヨーク留学を経て2011年に「松川レピヤン」に入社。シャツ織機を専門とする第三工場の工場長に就任。同市内のシャツ織機工場を引き継いで株式会社イト工場長も兼務。2016年10月21日に自社ブランド「レピヤンリボン」を立ち上げる

Volume 033

まつかわ たかまさ 松川 享正

伝統技術を使い新ブランド「レピヤンリボン」を立ち上げた

最盛期には980軒もの織物工場があった丸岡町。繊維王国の一翼を担っていたこの町は今、60軒弱が残るのみである。年を重ねる度、一つ、また一つ、工場が閉鎖されていく。時代の流れ、と一言で片づけてしまえば簡単だが、そこには蓄積された高度な技術があり、一度失えば取り戻すのに膨大な時間を要する。

オーストリア・チロール地方。この民族衣装の風合いをみせる「チロールリボン」は世界中で引く手あまただが、大量に作ることはできないのはこの町のたった一つの工場だけ。国内最後ともいえるこの工場もまた、時代と共に閉鎖の憂き目に遭う。しかしそこに未来の可能性を見た若者がいる。

小学生の頃からギターを手にし、末はミュージシャンと夢を描いて福井を離れた。父親からの「25歳までに福井に帰るかどうかを決める」の言葉に、自分の中に積み重ねるものを探し続けてきた。音楽とファッションの世界に携わり、販売の現場よりも生産の現場の方が、商品作りに参画している面白さがあった。25歳の決意は家に戻ることだった。

実家は織ネームの工場。織機の歴史は手織りからシャトル織機へ、そしてレピヤ織機へと生産性、効率化が進む。しかし、揺り戻しが

市場価値を新しく生み出す可能性がある。

起きるのは世の常。時代に置いて行かれたシャツ織機の織ネームを求める声が生まれてきた。「アパレルの現場でもネームをシャツ織機で作ってほしいという声が上がっていました。何よりも風合いが素晴らしい。ネームにこだわるメーカーも増えています」。かくして日本最大級のレピヤ織機工場にシャツ織機が導入されることとなった。

そのことを聞き「引き継いでほしい」と嘆願に来たのが国内最後のチロールリボンを作る工場だった。熟考の末引き受けることとなったが、「何故今更？」と周りの目は冷やかだった。生産効率、市場価値、どれをとっても無謀としか見えなかった。「ですが、閉鎖したら日本で生産ができなくなるくらい技術なんですよ」。

純粋に産業を守りたい思いもある。が、それ以上に可能性も感じた。「この技術はむしろ世界で評価されるもの。ここでできないものはない、と思わせるくらいものがあります。既に市場価値が固定化されていますが、やり方一つで新しい価値を生み出すこともできると思っています」。

今秋誕生したブランド「レピヤンリボン」。時の流れに埋もれかけた技術とアイデアを駆使し、時代を掴みに行くために歩き始めた。

アーティスト・高須賀活良氏をアートディレクターに迎え「レピヤンリボン」を展開。リボンはもちろんデザイン・縫製も福井産の、大正浪漫をイメージしたふくさやポーチを開発した。10月21日にサイトが開設(<http://rapyannribbon.jp>)



国際繊維エキスポに出展した際のブース